鼓童文化財団研修所
KodoApprenticeCentre

〒952-0855 新潟県佐渡市柿野浦885
Tel. 0259-28-2999 E-mail. kenshujo@kodo.or.jp

KODO

鼓童文化財団研修所
KodoApprenticeCentre

目 次

02｜未知への挑戦
04｜「鼓童」について
06｜佐渡
08｜研修所のカリキュラム
09｜様々な稽古・研修
太鼓／踊り／唄／笛
10｜様々な稽古・研修
能楽／茶道／講義・造形／実地研修
11｜共同生活・身体作り
12｜研修所の「食」
13｜農作業・収穫祭
14｜研修所の四季
18｜施設紹介 - 研修所
19｜柿野浦
20｜その他の施設紹介
21｜鼓童メンバー講師
22｜講師紹介
24｜講師からのメッセージ
26｜修了生からのメッセージ
28｜鼓童と鼓童研修所の沿革
30｜応募資格／応募方法／進路など
32｜よくある質問

（表紙写真）研修所全景。旧岩首中学校の校舎をお借りしています。向かって左の体育館を稽古場として、また右の教室を1階は食堂、作業場など共同のスペースとして、2階は研修生の居室として使用しています。

人生の2年間を太鼓と生活技術の習得にかける。佐渡の自然の、その真っ只中で。

それは、ただ太鼓を身につけるに留まらず、これから世の中で生きていくための土台を築く日々です。

研修所では、必要な範囲のものの中で暮らします。ものの溢れる世界から一旦離れ、少しの不便に耐えながら、たくさんの工夫を重ねます。作れるものは、自分で作ってみる。イメージを広げる楽しさを知り、また、ものごとの本質を見る目も養います。

お米や野菜も、できる範囲で自分たちで育てます。その育つ姿を見続け、最後は自分が生きるために、そのいのちをいただきます。自分の姿を、いのちのつながりの中で見つめるために。

研修所には、同じ夢に向かう仲間がいます。それは同時に、ライバルでもあります。人を信頼することの大切さと難しさと。本気でぶつかり合いながら、皆で試行錯誤を重ねる中で、前へ進んでいきます。

研修所での毎日は、そんな暮らしをベースにして、共同生活と太鼓に打ち込む日々です。
太鼓が自分の姿を映し出し、その自分からまた一歩進んで太鼓に向かう、その繰り返し。たたくその音が、まわりへ響き、思いが届くようになるまで。

佐渡の自然と、太鼓と、人が、あなたを待っています。

稽古場の入口。中学校当時の標語が今も掲示され、研修生を迎えます。

未知への挑戦

鼓童文化財団理事長
島崎 信

◎ しまざき まこと
東京生まれ。東京藝術大学美術学部卒業。東急百貨店で家具・インテリア設計を経て、デンマーク王立芸術アカデミー建築科研究員。
現在、武蔵野美術大学名誉教授。国際的なモダンチェア研究の第一人者で北欧建築デザイン協会副会長、日本・フィンランドデザイン協会理事長、NPO東京・生活デザインミュージアム理事長などを務める。近年は新潟の上越と佐渡において地産材を利用した家具「アースファニチャー」のデザインを行う。鬼太鼓座創設に関わり、また鼓童創立前からの相談役であり、2004年より財団法人鼓童文化財団理事長。
【主な著作】
「近代椅子学事始」「デンマーク・デザインの国」「美しい椅子(全5巻)」「ノルウェーのデザイン」ほか

鼓童は、佐渡島を拠点に、和太鼓を中心とした音楽活動を日本、世界各国で25年以上、行ってきたグループです。形を変えながら、研修制度も20年以上継続してきました。現在の研修所での勉強の2年目は、鼓童で活動したい人の為の専門課程ですが、1年目はどんな将来の志望を胸に抱いている人にも、学べる内容をもっています。

それは、「太鼓打ちはまず、社会人であれ」という考えからです。創作活動として、作品や舞台の上に結集されて出てくるものは、その場の表現の後ろ、その人の生活や考え方全部が表出してきます。それは人間の本来の暮らし、というものが芸術、我々で言えば太鼓の表現と決して無関係なことではないからです。その意味で鼓童文化財団研修所は、まず1年目は社会人としての土台を作り上げることを目標にしています。

今日の家庭や社会で孤立化・専業化が進み、失ってきてしまった人間本来のあり方をこの佐渡で実感し、理解する。そして2年目は加えて、世の中の水準以上のプロとしての技量を学ぶという仕組みです。

くらす・まなぶ・つくる

鼓童は、結成当初から「くらす・まなぶ・つくる」という考えを思想の柱として持ってきました。これは若者を育成する研修所にも当てはまり、それを実現する実践の場としています。

くらす＝共同生活で、自己中心の暮らしではない、社会の一部としての自分を確立してゆく。人間は自然によって生かされてきました。植物や動物のあらゆる命を頂いて我々は生きています。その恵みに気付き、有り難く享受する。自分自身を作り上げてくれる食べ物にまつわる、農業や調理といった経験を、太鼓の技術を学ぶとともに身につけてもらう。時間をかけて田んぼや畑を世話し、自分の手をかけた作物を食べた時の、胸に広がる喜びを感じられる人間でありたい。四季の移ろいの中で綺麗なものを綺麗と感じ、季節によって変わる太陽の光の輝きの違いを感じとるナイーブな感性を育てたいと願っているのです。

まなぶ＝我のほかすべて師なり。教師や学者は勿論のこと、社会の身近な人から学べることは多くて、貴重なものなのです。人生の経験を持ち、技術を備え、生活の知恵を持っている人を師と仰ぎ、敬うものです。未知に対して謙虚になり、さらに求めていくという学びの姿勢を身につけることが大切です。研修所のある柿野浦、岩首の方々、佐渡の農業、漁業の方々、皆先生として学ぶのです。

つくる＝様々なものを自作してみることを通して、自分の人生を作っていくことを考えるのです。太鼓を演奏するということは、太鼓の音を作ることです。音を作り、食糧を作り、料理を作る。そして陶器や木製品を作ることを研修所は学び重ねます。それはまた自分の人生を作ることに繋がるのです。この環境にいて学んでいることが、すべて肥やしになりながら、自分を作り上げていくという意識を持って毎日を送ってもらいたいのです。

鼓童研修所は、未知の知識と技術を学びたいという人に門戸を開いています。未知なるものを学ぶ為には、まず自らを白紙にすることから始まります。今までの先入観や思い込みを捨てて、未知の世界に真正面から挑戦してみることです。今までの生活の惰性的習慣を捨てて、研修所の歴史に積み重ねられた生活と教育に、積極的にチャレンジしようという挑戦者との出会いを待っています。

「鼓童」について

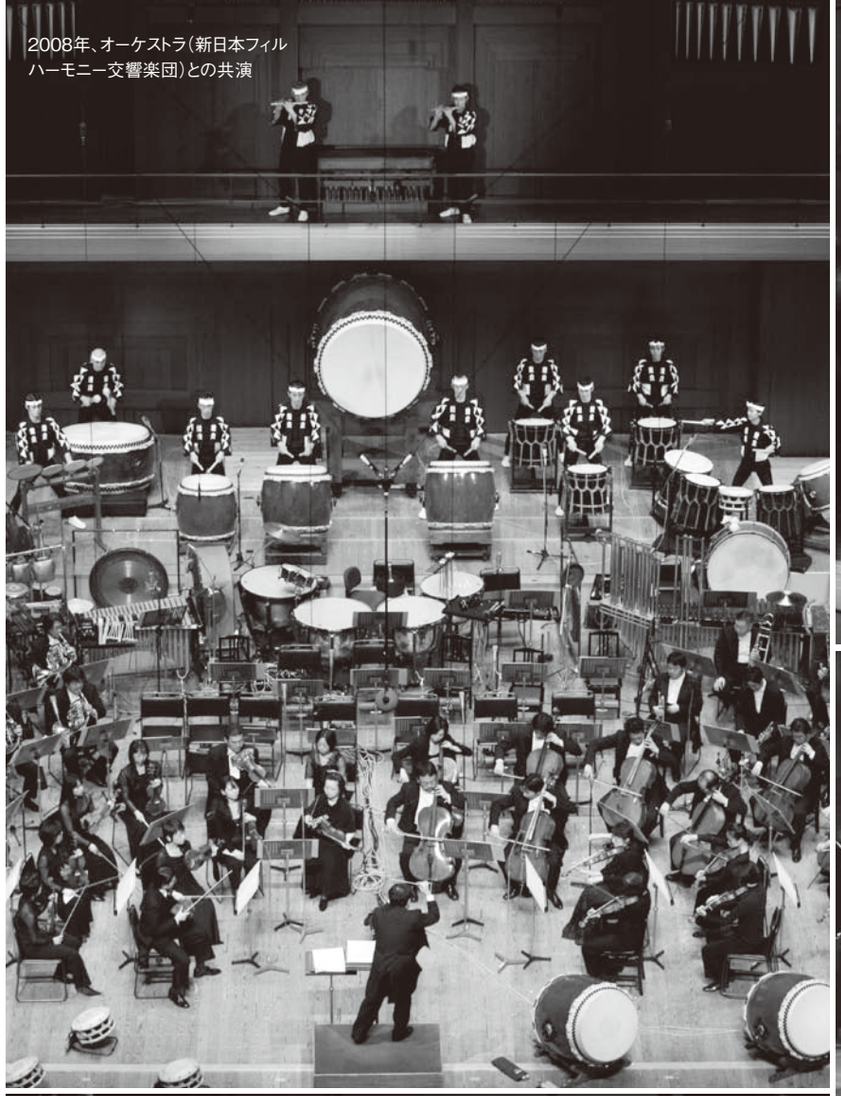
＜活動理念＞
私たちは太鼓とともに世界をめぐり、
多様な文化や生き方が響き合う「ひとつの地球」を目指します。

太鼓を中心とした伝統的な音楽芸能に無限の可能性を見いだし、現代への再創造を試みる集団。「鼓童」とは人間にとって基本的なリズムである心臓の鼓童から音（おん）をとった名前で、大太鼓の響きが母親の胎内で聞いた最初の音をイメージしています。そして「童（わらべ）」の文字には、子どものように何ものにもとらわれることなく無心に太鼓を叩いていきたいという願いがこめられています。

1981年、ベルリン芸術祭でデビュー。「ワン・アース・ツアー」というタイトルで世界各地をめぐり、これまでに46ヶ国で3,300回を越える公演を行っています。
劇場公演のほか、小中高校生との交流を目的とした「交流学校公演」、ワールドミュージック・クラシック・ロック・ダンスパフォーマンスほか異なるジャンルの優れたアーティストとの共演も数多く行っています。

2006年、結成25周年を記念し、歌舞伎俳優・坂東玉三郎氏との共演による舞台「アマテラス」を開催、2007年には東京・歌舞伎座での再演を果たしました。

豊かな自然と芸能の宝庫である本拠地・佐渡において、1988年より佐渡の市町村と共に国際芸術祭「アース・セレブレーション（地球の祝祭）」を毎年開催し、国際交流や地域振興に寄与しています。
同イベントは、1994年に外務大臣表彰、国際交流基金地域交流振興賞などを受賞。2008年に「第12回ふるさとイベント大賞」にて大賞（総務大臣表彰）を、2009年には米国ティファニー財団創設「ティファニー財団賞・伝統文化大賞」を受賞しました。
1997年に財団法人 鼓童文化財団を設立。「太鼓」を人と人、人と地域を結ぶコミュニケーションツールととらえ、鼓童文化財団研修所の運営、アース・セレブレーションの企画・運営、佐渡太鼓体験交流館の運営、各種ワークショップの開催、伝統芸能・文化に関する調査・研究者への支援など、社会教育や地域還元に重点を置いた活動を行っています。


2008年、オーケストラ（新日本フィルハーモニー交響楽団）との共演

アース・セレブレーション2008。ブラジルのパーカッション集団「オロドゥン」と共演。

2008年ヨーロッパツアーでオランダのロックバンド「プロフ」と共演。

「アマテラス」公演。アマテラス（坂東玉三郎）とスサノオ（鼓童・藤本吉利）

学校の体育館で子ども達と間近にふれあう交流学校公演。

佐 渡

佐渡島

佐渡は2004年3月に10ヶ市町村が合併し、新潟県佐渡市となりました。

鼓童が本拠地としているこの佐渡は、人口約6,5000人、周囲280キロ、面積は855.3平方キロメートルの島で、初めて訪れた多くの人がその大きさにまず驚かされます。

環境の島

かつては佐渡金山、そして民謡「佐渡おけさ」で全国に知られた佐渡。

現在は日本産のトキの最後の生息地として、またトキの野生復帰を目指すための餌場作り、巣となる森作り等に取り組む「人とトキが共生できる美しい島づくり」を目指す島として、また巨大杉の原生林など、豊かな自然に恵まれた環境の島として知られるようになってきました。

芸能が息づく島

「車田植え」「田遊び神事」などの農耕習俗や、生活の中の祈りから生まれた芸能の数々が、今なお島内各地に伝承されています。島に120もあるといわれる鬼太鼓（おんでこ／おにだいこ）をはじめ、春駒（はるこま／はりごま）、小獅子舞、やわらぎ、文弥人形芝居、つぶろさしなど。あるいは、佐渡おけさや両津甚句、相川音頭などの民謡。佐渡の人々にとって祭りや芸能は、なじみ深く、常に身近にあるものです。

能の大成者である世阿弥は佐渡に流され、「金島書」という謡曲集を残しました。また、能楽師の父をもつ大久保長安は、金山奉行となった際に能役者や芸能民を佐渡に伴いました。金山のある相川で奉納能を催し、佐渡で能が盛んになるきっかけを作ったと言われています。

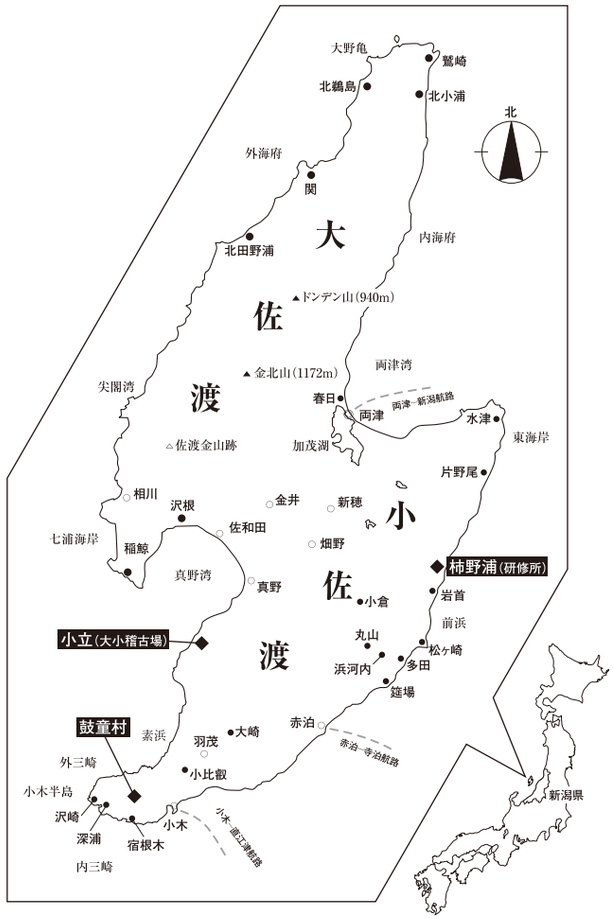
島内には、現在も30を越える能舞台が現存します。そのほとんどが神社の境内にあり、島民による演能が盛んに行われています。

日本の縮図

このように、京から流された貴人が都の文化を伝えたり、北前船の西廻り航路が開かれ西日本や北陸の文化が伝わってきたという歴史を背景に、佐渡には独自の文化が培われてきました。

貴族文化や武家文化、町人文化が渾然一体となって、佐渡文化が形成されていきました。

自然、歴史、芸術、文化。気候的にも文化的にも「日本の縮図」といわれるこの島全体が、生きた博物館のような奥深さを秘めています。



全国にわずか2ヶ所のみ伝わるという「車田植え」

鬼太鼓（鷲崎）

薪能

佐渡おけさの元と言われる「小木おけさ」

佐渡金山の神事芸「やわらぎ」

研修所のカリキュラム

大野亀での野外稽古。鼓童の代表的な曲目「屋台囃子」を打つ。

ご家族の皆様へ

ほんの数年前まで考えられなかったことですが、今では、携帯電話があれば、何もかもできてしまうように思えます。手間をかけずに、電話を手にすればすべて間に合う世界では、人は長期的な展望や、未来へのビジョンを持つことができなくなってしまうおそれすらあります。

研修所では、多少の不自由や制約が創意工夫を生み出すと考えています。「携帯電話を持たずに入所していただく」という理由もそこにあります。

入所早々、一本の竹から日々の食事で使う自分の箸を作ることと、木材にカンナをかけて太鼓のバチを作ることから研修は始まります。道具の使い方を、しっかり手間と時間をかけて身体にしみ込ませることは、カリキュラムの非常に重要な要素なのです。

研修所を修了しても具体的な資格が得られるわけではなく、また、鼓童のメンバーになれる確実な保証もありません。けれども、様々な研修や共同生活の経験を通して「生活する力」と「自分の言葉で考える力」を身に付け、皆様が見違えるほど逞しくなったお子さんに出会えることを、ご期待いただければ幸いです。

様々な稽古・研修

■太鼓　■踊り　■唄　■笛

研修所では、太鼓を打てるだけでなく、踊れて、歌えて、笛が吹ける技術を身につけます。稽古は、鼓童のメンバーや外部講師の方々が指導にあたる時間と、研修生自身による自主稽古の時間があります。また、鼓童の舞台メンバーとの合同稽古を行うこともあります。稽古は基本的に研修所で行われますが、内容によっては鼓童村などでも行います。季節や天候によっては野外でも稽古をします。

太鼓

太鼓をたたく前に、バチを作り、また独特な締太鼓の締め上げ（チューニング）などの楽器の準備や、取扱い方について覚えます。

太鼓の基本的な打法は桶太鼓、締太鼓、大太鼓といった順に段階を追って学びます。また「屋台囃子（やたいばやし）」「三宅（みやけ）」「大太鼓」「八丈太鼓（はちじょう）」「千里馬（ちょんりま）」などの曲の形で、様々なスタイルの太鼓を稽古します。

また、曲を演奏するのに必要なチャッパや鉦（かね）など、鳴り物（小物の打楽器）の稽古もします。

踊り

踊りは「岩崎鬼剣舞（おにけんばい）」「黒川さんさ踊り」「西馬音内（にしもない）盆踊り」などの東北地方の芸能や、「群星（むりぶし）」といった琉球舞踊まで、全国各地の様々なものを稽古します。地元佐渡の「鬼太鼓」では、地元の方に稽古をつけていただき、佐渡の祭りに参加させていただいています。

唄

唄の稽古では、発声・音程・リズムなどの基本から、作曲や合唱まで、声を用いた表現を学びます。また、鼓童の舞台でも歌われている「木遣（きや）り」「酒屋唄」などの稽古もします。

作業唄である「酒屋唄」の実感を得るため、造り酒屋での酒造りの体験等も行います。

笛

鼓童の舞台で最も多く用いられている篠笛（しのぶえ）を稽古します。

一年目は基礎的な音の出し方などを学び、二年目は選択制でより応用的な内容の稽古を行います。

「締め上げ」は二人掛かりで行う。

「鬼剣舞」の稽古。

唄の稽古。

篠笛の稽古。

様々な稽古・研修

■能楽　■茶道　■講義・造形　■実地研修

能楽

まずは野外の能舞台での薪能の見学から、能楽に親しみます。能（宝生流）、狂言（和泉流）いずれも、基本となる謡を中心に稽古します。また、本物の能舞台を使用して、稽古や発表会などを行います。

茶道

茶道（裏千家）の稽古は、半日ずつ月に二回。最初の一年では、部分を抜き出した割稽古から、お客様にお茶を供する一番基本の盆略点前まで。二年目からは選択制で、夏と冬の薄茶点前に進みます。茶花を生けることや、抹茶茶碗づくり、茶懐石料理づくりなどにも挑戦し、茶道が総合芸術であること、そこからおもてなしの心を学びます。

講義・造形

佐渡の歴史や自然についての講義や、また季節ごとの風物を訪ねて俳句を詠む吟行など。また、山菜採りや魚のさばき方、陶芸や藁細工（草履ほか）などの生活の知恵を地元の方々から教えていただきます。

実地研修

佐渡島内の公演やイベントで、舞台設営や楽器の搬入搬出、警備、受付、会場案内など、準備段階から当日までの現場を体験します。また、「鼓童塾」などのワークショップにアシスタントとして参加したり、島内の中学校などで行う「交流公演」では、研修生が実際に演奏したり自身の目標について話したりする機会もあります。

能舞台で謡を発表。

茶懐石料理に挑戦。

陶芸。

中学校交流公演

共同生活・身体作り

【共同生活】

昔の中学校の木造校舎を生活と稽古の場とし、日々のくらしを自らの手で作っていきます。

食事作り、掃除、洗濯、そして共同で使う物の管理など、生活に関わるさまざまな役割を分担して生活技術を学びます。日ごとのリーダーは日直が務め、稽古の進行や各種連絡等を責任を持って行います。

また、施設は共用スペースがほとんどで、洗濯機、電話などの備品類も多くが共用のものです。自分のことだけではなく、常に皆が気持ちよく過ごすことのできる環境を、皆で保つ工夫が必要となってきます。

様々な場所から、様々な年齢の、様々な人が、熱い思いを持って集まってくる研修所。

その中で、自分の考えを人に伝え、また人の考えを受け取って、ものごとを前に進めていきます。研修所での共同生活は、人と人とのつながりの中で生きていく力をつける、大切な要素と位置づけています。

研修所の一日（夏時間）

※冬時間は5:30起床となります。

4:50　起床、体操、掃除、トレーニングまたは食事作り
食事当番は、毎食約20人分の食事作りを担当します。

6:50　朝食

7:30〜9:30　ストレッチ、楽器の準備や稽古

9:30〜11:30　稽古、講義、作業など
太鼓や踊り、唄などの稽古の他、農作業や造形、講義など。

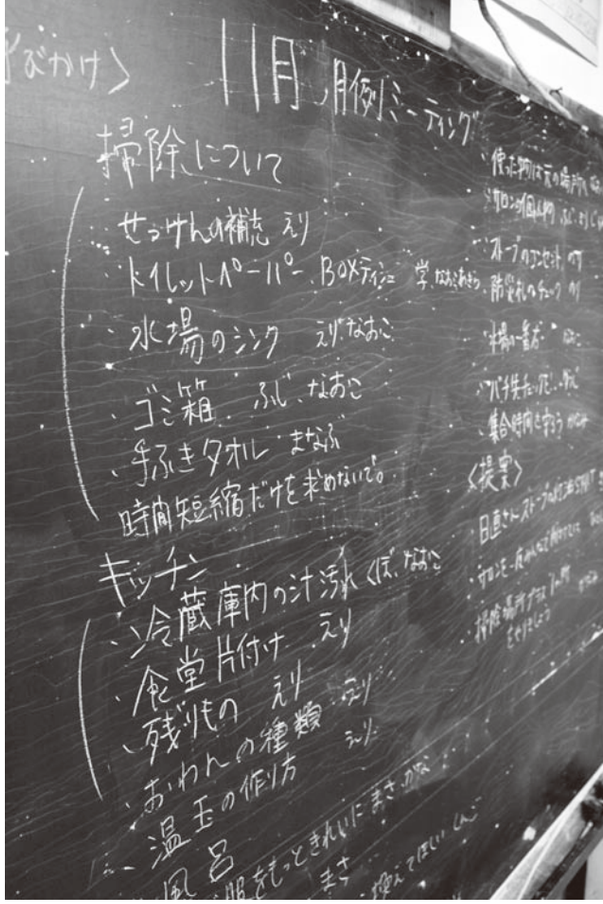
12:30〜14:00　昼食・休憩

14:00〜17:00　稽古、講義、作業など

18:30　夕食

19:30　各自の時間
個人稽古の他、日によって、ミーティング、各係の作業などが入ることもあります。

23:00　就寝



ミーティングでは、実に様々なことが話し合われる。

【身体づくり】

研修所での身体づくりは、稽古に必要な基礎体力をつけること、そして自分の身体感覚を鍛え、自然な動きを身につけるとともに、自分のからだをベストコンディションに保つ自己身体管理能力を体得することを目的としています。

普段動かしづらい筋肉に働きかける早歩きとダッシュを毎朝の日課とし、基本の身体が出来てきたところでランニングを組み合わせるなどのトレーニングを行っています。

また、自分の中に元々ある自然な力を引き出すための、脱力身体をつくるトレーニングは重要で、これを太鼓や踊りや唄に繋げていきます。しかし実はこれは昔の普通の日本人の身体であり、私達は失われた身体を取り戻そうとしていると言えるでしょう。その意味では、体育館の雑巾がけや、身動きしにくい田んぼの泥の中での農作業なども、日常的に身体を鍛える良い機会となっています。

研修所の「食」

■ 育てたものを食べる

研修所では、自給自足には足りませんが、食べ盛りの研修生約20名が食べるお米の半年分を育てています。種まき、育苗、田植え、草取り、そして稲刈り。この自分達が育ててきた過程を思い起こし、味わう新米は格別です。

また、野菜は季節ごとに少しずつ食卓に上がるくらいのものを育てています。

自分達で植え、育つ姿を見て、自分達の手で収穫したものを食べる。この当たり前のことのできる場所が、今どれくらいあるでしょうか。

■ おもてなしの心

人に喜んでもらおうと工夫すること。その思いが伝わった時の喜び。また、料理を作ってもらった時に、相手の気持ちを受け取ろうとすること。

「食」から、思いを伝え、受け取ることを学びます。

■ 命あるものをいただく

お米や野菜の「いのち」をいただき、そのおかげで自分達が生きているという実感を持つこと。生きるとはどういうことかを見つめること。それが、太鼓や踊りや唄で表現する時の「土台」を育むと考えています。

感謝の心をもって「いただきます」。

大皿に盛った料理を皆で取り分けて食べる。

■ 食事当番

1・2年生合わせて約20名の日々の食事は、研修生自身が当番制で作ります。

なお、鼓童村では鼓童のメンバーが自身の手で、やはり当番制で食事を作っています。鼓童では、「自分の手で自分の食をまかなう」ことが、社会人としての基本と考えています。

■ 料理の基本を学ぶ

先輩と組になっての食事当番の中で、ご飯の炊き方や、だしのとりかたなど、料理の基本を実践を通して学びます。また、地元の魚屋さんから手ほどきいただく「魚のさばき方」の時間もあります。

■ 旬を知る

献立は、できるだけ旬の食材を使うことを心がけ、食事当番になる人自身が考えます。自分達で野菜を育てていると、今おいしい野菜は何かがわかってきます。

■ 手作りを心がける

加工品はできるだけ減らし、マヨネーズなど作れるものは手作りします。いつからか、研修所では、カレーも市販のカレールゥを使わずに作るようになりました。

■ 佐渡の料理を学ぶ

祭りなどでご馳走になった時においしいと思った料理の作り方を、地元のお母さん方に教えていただいたり。また、ソバ打ち体験などを行う機会もあります。

農作業・収穫祭

【農作業】

研修所の農作業は、できるだけ手作業で、五感で感じることを大事にしながら行っています。

■ 田んぼ

春先に種もみを選び、一粒ずつ苗箱へ蒔いていきます。40日余りかけて苗を育て、皆の手で田植え。夏場は草取りを繰り返しながら、実りを待ちます。秋、収穫。天日に干した後、脱穀をし、おいしく新米をいただきます。

■ 畑

自分たちで、育てる野菜を相談して作ります。トマト・なす・ねぎ・かぼちゃ・ブロッコリーなど、その季節の野菜が畑で育ちます。トレーニングの合間に畑に足を運び、水やり、そして草取り。旬のものがたくさん穫れた時は、料理や保存に工夫を凝らします。

■ 柿

研修所から1時間ほどのところにある柿畑での作業です。春、剪定（せんてい）した枝の整理作業、夏場は摘蕾（てきらい）、そして毎月の草刈り。秋の収穫まで、ほぼ毎月一回足を運びます。

昔ながらの道具を使っての田植え。

習字や陶芸作品などと一緒に、収穫した野菜も展示。

【収穫祭（しゅうかくさい）】

毎年11月、研修生の自主企画・運営による「収穫祭」という行事を開催しています。研修所としてお借りしているこの岩首（いわくび）中学校の出身の方々や、研修所講師の先生方、日頃お世話になっている近隣の集落の方々などをお招きして、感謝の気持ちを届けます。研修所が二年制になった1997年に、研修生自身の発案により始まりました。先輩から後輩に引き継がれ、2009年には12回目を数えました。例年、稽古場いっぱいに約150名の方々がおみえになり、研修生を応援してくださいます。

自分達で作ったお米や野菜で心を込めて料理を作り、太鼓叩いて歌って踊って、またお茶席を設けるなど、日頃の稽古の成果も見ていただく盛り沢山な内容です。一つの祭りを成功させるため、お客様に心を届け楽しんでいただくために、計画、準備、段取り、リーダーシップ、チームワークの大切さを痛感します。収穫したものを発表する場であるとともに、収穫祭自体がさらなる学びの場となっています。

研修所の四季

くらし、農作業、祭りなどを通じ、季節を肌で感じながら過ごす研修生活の、ごく一部をご紹介します。

春

芽吹きとともに1年生が入所し、冬を越した研修所は一気に賑やかになります。
生活のリズムや、ものごとを学ぶ姿勢を身につけていく大事な時期です。

柿野浦の鬼太鼓

山菜採り

【祭り】

島内の祭り見学／地元の祭りに参加
佐渡では集落ごとに神社の祭りがあり、若衆が各戸を門付けして回る「鬼太鼓（おんでこ／おにだいこ）」という芸能が盛んです。
研修生は島内の祭り見学を通して、生活の中の祈りから生まれた芸能を感じていきます。
2年生は、柿野浦鬼太鼓保存会の皆様による13晩の稽古を経て、地元柿野浦の祭りに参加します。集落の一員となるこの日は、研修生にとって一生に一度の体験です。

【くらし】

山の恵み、山菜採り
ウド・タラの芽・セリ・フキ・ワラビ・行者ニンニクなどの山菜を採り、保存方法や調理法を学びます。
山の恵みのごちそうが、これほど心を豊かにさせるとは…新発見の1日です。

【農作業】

苗作り、田植え
畔塗り、代かき、田植え。様々な作業は、できるだけ機械を使わず、自分達の手で行います。
研修所の田んぼは、約5反（1反は20m×50mくらい）の広さで、研修生が食べる約半年分のお米をまかなっています。

［研修生日誌より］5月　田植え
先日見学した「車田植え」を思い出し、苗を泥に差し込む…が、うまく立たない。何度も抜き差しすると地盤が緩くなり苗が浮いてしまう。事も無げにやっていた方々の凄さを身をもって実感。足がとられる田んぼの中でずっと作業していたら、足が棒のようになりました。だから昔の人は足腰が強かったのだな。皆で米の選別からして育てた苗。美味しい米が実るように祈りましょう。

※「車田植え」：国の重要無形民俗文化財に指定されている農耕行事。車田植は佐渡と岐阜県の高山に古くから伝えられ、中でも佐渡の北鵜島（きたうしま）の車田植は、奈良時代から続くと言われています。田植え唄が歌われる中、３人の早乙女（さおとめ）により鐘のような形の車田に渦を巻くように苗が植えられていきます。

夏

8月は、鼓童メンバーも研修生も連日「アース・セレブレーション（EC）」の準備にかかりきりとなり、研修生も鼓童村へ泊まり込む時期があります。限られた時間の中で稽古に集中することが、秋以降の伸びにつながっていきます。

【くらし】

魚のさばき方講座
佐渡は魚の宝庫。アジやイカ、サザエなど、旬の食材のさばき方を、地元佐渡の魚屋さんに教わります。

【農作業】

除草作業／夏野菜の収穫
田んぼも畑も、夏草の勢いとの追いかけっこです。除草剤は使わず、ひたすら手作業で草取りをします。
稲もどんどん成長し、夏の終わりには青い穂が顔をのぞかせます。
トマト、きゅうり、ピーマンなど、自分達が育てた夏野菜が食卓を賑わします。

【祭り】

小木港祭りの見学、参加
小木港祭りは、佐渡の夏の終わりを彩る大きな祭りです。
練り御輿・小獅子舞・小木おけさ・小木祭り太鼓・佐渡鬼剣舞・サンバパレードなど、いろいろな芸能が町内を巡ります。
鼓童のメンバーや研修生は好きな芸能に参加させていただき、祭り好きの小木の方々と親交を深めます。

［研修生日誌より］8月　ECかたづけ
祭りの後の城山公園は静かで平和です。送り太鼓の警備は、今までのお客さんからの目線と全く違う部分。安全を一番に考えて、お客さんと鼓童メンバーの間をとる役目です。去年まで自分がお客さん側で、こうして送り太鼓を楽しみにして港に来たのを思い出しつつ、帰っていくお客様の声を背中に感じつつ、無事に送り出せました。

畑作業

※「送り太鼓」：ECのイベントがすべて終わった翌朝、小木港から出航するフェリーでお帰りのお客様を、鼓童メンバーが埠頭で太鼓をたたいてお見送りします。公式イベントではありませんが毎年の恒例となっており、遠ざかっていく船が見えなくなるまで、笛や太鼓の演奏が続けられます。

秋

ワークショップや交流公演などの実地研修がたくさんあります。
稲刈りや柿の収穫作業もあり、慌ただしくも充実した日々です。

【祭り】

岩首祭りに参加
1年生は近隣の岩首集落の祭りに参加します。春の柿野浦の祭りと同様、神社で地元の方から13晩の鬼太鼓の稽古をつけていただきます。
祭りの準備にもお手伝いに伺って、皆で力を合わせて幟を立てたり提燈をつけたり。祭り当日に向けて、気持ちは自ずと高揚していきます。

【農作業】

柿の収穫
春から、草刈りや摘蕾作業など手をかけてきた柿の木に、オレンジ色の実がたくさん実ります。収穫するその数、約1万4千個。選別、箱詰めをして、お世話になっている皆さんへと発送します。

稲刈り
刈り取った稲は、研修所の校庭に立てた「はざ木」にかけて乾燥させます。

【くらし】

お米パーティー
研修生の楽しみは、研修所でとれた新米を味わう「お米パーティーの日」。ご飯に合うおかずを作って、たっぷりといただきます。

[研修生日誌より]9月　岩首まつり
約2週間に及ぶ稽古、今思うと、たった2週間と感じる程、内容の濃い時間だった。今日はその成果が試される日。岩首の方は祭りに対して本当に熱い。特に鬼面をつけ鬼になった4人の、命を懸けたかのような舞には感動した。鬼太鼓と祭り、1年の中の、このたった2週間が一つの地域のまとまり、絆を強くしていくのだと感じた。

※「岩首まつり」:佐渡市岩首は、鼓童研修所にほど近い約70軒の集落。鬼太鼓の指導をして下さるのは「岩首鬼太鼓余興部」の皆さん。13晩の稽古を通して、芸のことばかりでなく、人生のことなど、様々な教えをいただいています。

冬

1月には最終発表会や修了式があり、総仕上げの時期です。1年生の進級選考、2年生の準メンバーへの選考もこの時期に行われます。それぞれが出された結果に向かい合い、そして自分に向かい合い、次への一歩を踏み出します。2月～3月は厳しい寒さの中、太鼓などの集中稽古が行われ、心身共にとことん鍛えられます。

【くらし】

もちつき／しめ縄つくり
新年を迎える準備。自分たちが育てたもち米でもちつきをし、刈り取った稲わらを使ってしめ縄を作ります。

酒蔵見学
米どころである佐渡では、酒造りも盛んです。
蒸し上がったお米を運ぶ作業、麹室で米麹を作る作業、大きなタンクに仕込んだもろみを混ぜる作業。酒造りにかける杜氏や蔵人の思いに触れながら、日本酒の仕込みを体験します。作業の最後には響きのよい蔵の中で、酒造りの作業唄である「酒屋唄」を歌わせていただきます。

【農作業】

堆肥つくり
次の一年に向けて、稲わらや落ち葉で堆肥作りをします。

【祭り】

大崎そばの会
200人ものお客様が集まって、昔ながらの料理や手打ちソバ、そして芸能の数々を楽しむ会。羽茂・大崎地区で昭和53年からひと冬に数回開催されています。料理を作るのも芸能を披露するのも、主に地元のお母さん方。研修生達は来る収穫祭のお手本として会を楽しみ、時にはお手伝いをさせていただきます。

[研修生日誌より]12月　カキ養殖場見学
「獲る、のではなく頂く」という言葉は胸にグサリときました。自分は今まで「獲る」という感覚を持っていました。柿野浦の海でサザエを獲る時も、研修所でお米や野菜を育てる時も。山・川・海に人は育てられている。誰もが言う「感謝の心を忘れるな」。自分は地球に対して何ができるのだろう、研修所にいる間、考えてみたいと思います。

修了証書を手に

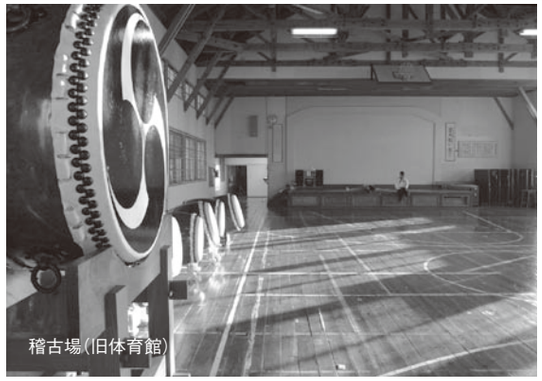
酒蔵見学

※「カキ養殖場見学」:カキの養殖場のある加茂湖は、新潟県最大の湖。淡水と海水が混じり合う汽水湖で、河川からそそがれる植物性プランクトンが豊富な為、カキの養殖に適しています。佐渡ではこの加茂湖と真野湾でマガキを養殖しています。

施設紹介

研修生が稽古のために利用する主な施設を紹介します。この他にも稽古内容に応じて様々な施設を利用することがあります。

研修所全景。右の方には稲をかける「はざ木」が見える。



稽古場(旧体育館)

教室を仕切って部屋として使用

鼓童文化財団研修所

研修生が日常的に生活し、稽古を行う拠点です。柿野浦(かきのうら)という集落にある、旧岩首(いわくび)中学校の校舎を利用しています。

体育館を稽古場に、また生活する場所は教室を改造して使っています。「校長室」「理科室」などと、中学校として利用していた頃そのままの名称で呼んでいる部屋もあります。

また、「最善を尽くせ」「求め敬い磨く」という、中学校当時の標語もそのまま掲げさせていただいています。

研修所はまた、合宿型のワークショップ「鼓童塾」の会場として一般のお客様を受け入れたり、また秋には研修生自らが企画する「収穫祭」を開催し、地元の方々をお招きする会場にもなります。

柿野浦(かきのうら)

研修所がある集落、柿野浦と研修所の成り立ちをご紹介します。

島・周辺部の集落

柿野浦は、両津港から海岸線を車で40分南下した前浜(まえはま)地区の30戸余りの集落です。

現在の佐渡では、島の中央部に企業・人口が集中し、周辺部では過疎化、高齢化が進行しています。地域の学校も統廃合が進み、家族全体で生活し易い中央部の国仲(くになか)地区に移る場合もあります。そういう流れの中にある島の周辺部、そこで生活しているのは主におじいちゃん、おばあちゃん。平日はひっそりと穏やかな村の風景が広がります。

廃校を機に

1996年4月、研修所が真野・大小(だいしょう)地区から柿野浦の旧岩首(いわくび)中学校の校舎に移転しました。昭和26年に完成した学校は、集落の皆さんが力を合わせ、材木や瓦を山の上まで運んで建てたものです。ここは、鼓童のスタッフ・山中津久美の母校。1995年3月に廃校になった学び舎を壊してしまうのがしのびなく、研修所としてお借りすることはできないかと働きかけ、取り壊しの予算分を道の整備にあてることで当時の両津市とは交渉が成立しました。

「最初はやっぱり、若い人たちがたくさん来て、寝泊まりして大丈夫かという意見もあったね。」

こんな不安がありながらも、受け入れてくださった柿野浦の皆さまに改めて感謝申し上げます。長く居てくれ、という気持ちをいただいて30年契約を取り交わしました。内部の改修も柿野浦の方々にお世話になりながら「鼓童文化財団研修所」がスタートしました。

暮らしから学ぶ

柿野浦で2年間過ごすことで、人間の本来の暮らしを知るという目標が現実のものとなりました。集落の様々な作業を通して、生活の知恵や工夫を学びます。集落の安泰を願う祭りでは、鬼太鼓を習い、芸そのものや人と人の繋がりの熱いものを感じます。また、毎年二年生が行う自由研究で柿野浦に関することをテーマにした者は、尊敬の念をもって年配の方からお話を伺い、生きたレポートをまとめました。

その他、野菜をいただいたり、水道や電気の不具合を解消していただいたり、悩み相談をしたり。皆さんにお世話になることは数知れません。

研修生にとって、柿野浦は第二の故郷。柿野浦の祭りの日には、懐かしい方々との再会を果たしに帰ってくる、修了生の姿を見ることができます。

柿野浦祭り。一日の祭りを通して、研修生は集落の一員となる実感を得る。

佐渡島内 その他の稽古施設

研修生が研修所以外に稽古のために利用する主な施設を紹介します。
この他にも稽古内容に応じて様々な施設を利用することがあります。

◆鼓童村稽古場

佐渡・小木地区にある鼓童の本拠地、鼓童村にある稽古場です。木造建築で、大きな屋根をアーチで支えています。研修生は見稽古(見学)のために訪れるほか、年4回程度の発表会や、舞台メンバーとの合同稽古などの際に使用します。

◆和泉邸(鼓童村)

茶道などの稽古をここで行います。佐渡・羽茂地区の古民家を移築した建物で、棟札には文政八年(1825年)とあります。元の持ち主の方のお名前にちなみ「和泉邸」と呼ばれています。屋根を茅葺きから瓦に替えた他は、出来る限り当初の形を復元しました。

◆大小稽古場

鼓童の活動初期に拠点としていた場所で、旧真野町・大小小学校の建物を利用しているため、この名で呼ばれています。年1～2回の合宿稽古等で使います。なお、'96年に現在の研修所に移る前の4年間は、ここが研修所として使われていました。

◆佐渡太鼓体験交流館

太鼓を始めとした伝統芸能の体験や、ソバ打ちなど地域の特色を活かした食文化を通じた交流などを目的とした佐渡市の施設。愛称「たたこう館」。2007年より鼓童文化財団が指定を受け、管理運営しています。鼓童村のすぐそばにあります。

鼓童メンバー講師

鼓童の舞台で活躍する現役の舞台メンバーが研修生の指導にあたります。
下記の講師の他にも、稽古テーマに応じてメンバーが指導に入ります。

■ 舞台メンバー講師

藤本吉利 太鼓、踊り、唄

長年にわたり「大太鼓」「屋台囃子」等、舞台のクライマックスを飾る。鼓童の最年長奏者。

小島千絵子 踊り

数少ない女性メンバーの一人として、太鼓中心の舞台の中で、独自の舞踊の世界をきりひらいている。

藤本容子 唄

「こえ・からだ・こころ」の響き合いを探求のテーマとし、うたによる心の「根」の再生を目指す。

山口幹文 篠笛

笛・胡弓・箏・三味線などを務めるほか、舞台演出や作曲も担当。

以上4名は鼓童創設メンバー

齊藤栄一 太鼓

('82年～)アンサンブルの要として「モノクローム」等の代表的な演目をリードする。

見留知弘 太鼓

('90年～)「大太鼓」や「屋台囃子」「三宅」等、舞台の中心となる演目の太鼓を演奏。

新井武志 太鼓

('93年～)「屋台囃子」の締め太鼓など、曲を支える「地打ち」のスペシャリスト。

辻 勝 太鼓

('98年～)太鼓、唄、踊りなど、オールラウンダー的存在。

船橋裕一郎 太鼓

(2001年～)「三宅」のソロなど重要なパートを務めるほか、演出にも挑戦し始めている。

石塚充 太鼓

(2002年～)近年、鼓童の舞台の演出を数多く担当。

砂畑好江 唄、太鼓

(2002年～)「千里馬」などの太鼓を務める傍ら、やわらかな歌声を聞かせることも多い。

阿部研三 踊り

(2003年～)舞台では「剣舞」を中心に、踊りの演目を多数担当。

船橋裕一郎以下4名は鼓童文化財団研修所の修了生

■ **スタッフ講師** スタッフ志望者へのアドバイスや、実地研修における指導。また、身体ケアや農作業、稽古の立会い、英会話、講義など。鼓童のスタッフは、様々な場面で研修生をサポートします。

大井良明、大井キヨ子、青木孝夫、菅野敦司、山口康子、千田倫子、石原泰彦、後藤美奈子、松浦充長、土橋達也、メラニー・テイラー

■ **研修所の運営** 研修所の管理・運営等に中心となってあたります。稽古や生活スケジュールの調整、研修生の体調管理なども行います。

所長: 石原泰彦　研修所事務局: 千田倫子、山口康子、松浦充長

講師紹介

ここにご紹介したみなさんの他に、外部講師を招いての鼓童内勉強会などを、鼓童メンバーと共に受講することもあります。

赤塚五行（あかつかごぎょう）［俳句］

新潟日報佐渡版俳句選者、俳句結社「朱鷺」主宰　佐渡市金井

長年、佐渡の俳句文化の普及に努められている俳人。季節の吟行など島内のフィールドワークも盛んに行われている。山菜採り、山菜料理の達人。

講義: 年4回／春夏秋冬、季節の吟行。山菜講座など。

岩崎ちひろ（いわさき）［魚のさばき方］

魚屋　佐渡市相川

相川の漁師町稲鯨（いなくじら）の鮮魚店店主。また、70年代に佐渡フォーク村運動を仕掛けたシンガーソングライターでもあり、研修生はその唄ごころにも触れさせていただいている。

実習: 年1回／魚のさばき方。

狩野泰一（かのうやすかず）［笛］

篠笛奏者　佐渡市羽茂

1987年「鼓童」のメンバーになって以来、世界20ヶ国で1000回を超える公演に参加。1997年に独立後は、佐渡に暮らしながら日本古来の「篠笛」の可能性を広げ、コンサート、笛指導など国内外で幅広く活動。研修所やECのワークショップなどでも、篠笛の基本をわかりやすく指導いただいている。

稽古: 不定期／篠笛

西須殉治（さいすじゅんじ）［木工］

指物（さしもの）師　佐渡市羽茂

三代にわたる指物職人。本来の指物（建具・家具）の範疇にとどまらず、持ち前の好奇心と研究心で注文に応じて何でも製作。鼓童の舞台で使用している太鼓の台など、舞台道具のほとんどを手がけて下さっている。

実習: 年1回／カンナの使い方、研ぎ。バチ作り技術。

佐藤利夫（さとうとしお）［自然・文化］

佐渡研究者　佐渡市相川

佐渡の高校教諭を務められた後、佐渡の地理・歴史・民俗について幅広く調査研究。豊富なフィールドワークに基づいた講演を各地で行われている。

講義: 年2回程度／スライドや実際に散策しながらの講義

福嶋徹夫（ふくしまてつお）［自然・環境］

元・新潟県栽培漁業センター所長　佐渡市両津

25年間に及ぶ水産業改良普及員時代には漁具の改良や研究グループの育成に注力。魚を見る目を通して、人と自然の関わり、環境保護の活動の輪を広げられている。

講義: 年2回程度／牡蛎の養殖場見学など

松田祐樹（まつだゆうき）［祭り・芸能］

佐渡の芸能研究者　佐渡市両津

地元の春日鬼組の一員として裏太鼓を叩く。佐渡に伝承されている芸能を未来へ生き生きと継承していく為に、2008年にNPO法人『佐渡芸能伝承機構』を立ち上げ、各地域を応援されている。

講義: 年3回／佐渡の祭りの概要、
祭りの見方。鬼太鼓芸の実践など。

松永政雄（まつながまさお）［能］

宝生（ほうしょう）流教授嘱託・幸清（こうせい）流小鼓準職分　佐渡市羽茂

長年にわたり宝生流能を修め、後継者育成など佐渡の能楽伝承に尽力。研修生にも、能の謡（うたい）について拍子の理論から詳しく教えをいただいている。

稽古: 1年次後半に月2回／「羽衣」「高砂」
など代表的な演目の謡。

桃井宗生（ももいそうせい）［茶道］

裏千家学校茶道教授　佐渡市小木

京都裏千家学園での修行の後、佐渡にて裏千家茶道を広める活動を開始。学校や職場での茶道教授や、茶会の開催など、佐渡での茶道普及に尽力されている。

稽古: 月2回／1年次　盆略点前まで。
2年次（選択制）千歳盆点前・運び平点前

熊田勝博（くまだかつひろ）［舞台］

照明家　神奈川県

舞台照明製作会社ステージ・ライティング・スタッフ所属。演劇の照明などを多く手がけると共に、鼓童の舞台照明デザインも長年担当いただいている。

実習: 年3回／舞台機構、舞台照明に関する
講義、実践など。

伊藤多喜雄（いとうたきお）［唄］

民謡歌手　神奈川県

「民謡界」の枠にとらわれず、「民謡」の復活へ向けて、独自の活動の場を開拓。2006年よりNPO『民俗芸能伝承学舎』を立ち上げ、唄を通して日本各地で幅広い社会活動を行われている。

稽古: 年1回集中／各地の民謡への取り組み

岡田京子（おかだきょうこ）［歌］

作曲家　東京都

アジアの音楽と民族に造詣が深く、アイヌや朝鮮をテーマとする作品を多く発表。舞台音楽の仕事に携わる傍ら、1990年頃より、全国各地を回って歌の会を開く旅を続けられている。

稽古: 年1回集中／自分を引き出す歌作り。
各国の歌、民謡、日本音階理論など。

小笠原匡（おがさわらただし）［狂言］

能楽師和泉流狂言方、重要無形文化財総合指定保持者、
千葉大学客員教授　大阪府

初世野村萬（人間国宝）、故 八世野村万蔵（演出・劇作家。織部賞受賞）及び九世野村万蔵に師事。国内外の公演・狂言指導多数。佐渡の芸能への造詣も深く、狂言と鼓童のコラボレーション「蓬莱貴譚（ほうらいきたん）」には佐渡の様々な芸能を取り入れて演出された。

稽古: 年1回集中／日本芸能の歴史講義、
小舞「松の舞」など。

自分のバチを削る

「松の舞」を舞う

グループに分かれて歌の作曲

［特別講師］

黒川さんさ踊り保存会（岩手県盛岡市）、西馬音内（にしもない）盆踊り・北の盆（秋田県羽後町）の皆さんなど、伝統芸能に携わる方々をお招きし、地元の方がまとっている空気と共に、地域の芸能を学ばせていただくこともあります。

講師からのメッセージ

「ようこそ、宝の島へ」　金子竜太郎

鼓童が初めて研修所を設けた年、僕は研修生になりました。現在の研修所とは場所も内容もずいぶんと違いがあるでしょう。

でも一つ言えるのは、研修所は宝の在処（ありか）ではなく、そこに至る地図の一つであるということです。羅針盤となるのは関係性の中での学び。たとえば自然。太陽と月や星、そして海、山、風、鳥、虫、花。それらが関係し合う命のリレーを、音や色など五感いっぱいで感じるでしょう。たとえば人間。共同生活の中で、自分と違う価値観や感情の揺れを目の当たりにすることもあるでしょう。それらを通して、自分の中にある二極、すなわち愛と恐れに向き合うときがあるかもしれません。研修生活では目の前にある関係性と強いリアリティーを持って向き合うことになります。だからこそ学べるのです。知識とは「自分が」学ぶこと。沢山技術を身につけて下さい。智慧とは「自分を」学ぶこと。堂々と挫折して、張り切ってリベンジして下さい。辛く苦しくなって「～ねばならない」と感じたら、心の奥底に降りて行き「～したい」と言っているシンプルな気持ちに従って下さい。そうやって潔くコロコロの声に耳をすますとき、何物にも囚われない童のココロに触れられるでしょう。それこそ鼓童のDNAであり、自分自身の宝となるはずです。それを舞台や生活の中で、誰かと分かち合ってみて下さい。その度に世界は輝きを増し、あなたの宝の輝きも何倍にもなっていくでしょう。宝の島に訪れた先達として、僕は講師という形でエールを送ります。

写真：前澤良彰

［かねこりゅうたろう／太鼓など］
和太鼓奏者　千葉県
1987年「鼓童」の奏者としてデビュー。中心的奏者の一人であり、作曲、演出などで20年間活動。2007年に独立後も豊かな響きと多彩なリズムを追求し、世界38カ国を巡る。2009年、独自の奏法によるチャッパ教則DVDをリリース。ワークショップは、心身の探求に基づく奥深い内容を解りやすく丁寧に指導。国内外より高い評価を得ている。
稽古:年4～6回集中／身体技法を通じての太鼓や踊りへのアプローチ

「研修生との学び」　金城光枝

琉球舞踊を指導することで研修生と触れ合うようになってから、16年ほどになりました。毎年、輝く目に前向きな情熱を秘めた学び人に出会える私は非常に幸せと言えます。

私が研修所に通う上での目的は、独特の沖縄の伝統舞踊を伝授する中で、『ものごとを習う基本精神を身につける』という、ただそれだけです。「あなた方が自分で創っていこうとしているものは、結局伝統的なものが基本、基礎なのですよ」と伝えたいのです。新しい創造も、まず何かを取り入れたり、身体の中に吸収してから生まれます。根付いて、息づいているものから生まれるのであって、それは見せようとか、飾って創るものではありません。伝統芸能に携わっている人達は、そうやって十年、二十年と苦労しながら励んでいく中で、見えてくる自分というものがあるのです。

鼓童は、様々なものを取り入れて自分達の表現にし、チャレンジしながら新しいものを生み出していきます。だからこそ、守り続けている方達と深く気持ちを通じ合わせながら、芸能と関わっていくことのできる人達の集まりであって欲しい。その為に、研修生の時から厳しく、心を鍛えることを伝えていきたいのです。

太鼓中心の日々を思い描いて、今までの生活を一転し佐渡での共同生活に入ったであろう研修生。ここで出会う様々な伝統の中から真髄となる何かをそれぞれが見つけ出し感じる事で、今ある自分を刺激し、前進させる。そんな事を体験して下さることを願っています。長い道のりの、たった一ページにもならない指導時間ではあるけれど、学び人と学ぶ大切な時間として、私自身もしっかりと噛みしめています。

［きんじょうみつえ／琉球舞踊］
琉球舞踊家、太圭（たか）流華の会師範　佐渡市羽茂
1979年琉球舞踊太圭流家元・佐藤太圭子氏に師事。沖縄タイムス芸術選賞最高賞を受賞。2004年沖縄県無形文化財・伝統舞踊伝承者認定。佐渡を拠点に、鼓童メンバーとのユニット「花結」ほか、公演や舞踊指導などの活動を行っている。
稽古:2年次の一ヶ月間集中／琉球舞踊の技法を連ねた練習曲「群星（むりぶし）」

「ものづくりの心」　葛原正巳

本当の個性を出す

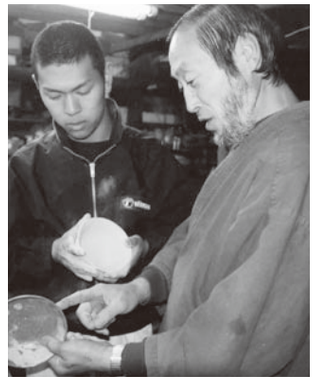
作った人を出さないようにするのがすごく難しい。この焼物ができていいなあという思いでいるというか、自然がこういうものを作ったという思いだな。とにかくそういう焼物が好きだなあということ。そういう心の働きで奥底から出るものに任せれば自然とそうなる。

まあ、音楽でも同じだろ。人の為になることをやるというのんは、そういう心境にならんうちは、すごく損な気持ちになる訳だ。人の為に働くのは馬鹿らしいと思えるけども、そういう境地になってみれば、それの方がよっぽどいいということが分かる。鼓童はそういう気持ちになり易い条件がすごく揃うとると思うな。研修生の若い人達には、自分の中の本当の個性を出すことと、その個性を人の為に使いたいと思えるようになる修練を積んで欲しい。それはその人の一番理想的な生き方でもあり、一番の幸福になると思う。

心の進化で深まる芸

表面的なものは自分の周りでしか通用せん。奥底から出てくるものなら国境を越えても通用すると思うし、もっと奥底から出れば、時代も越え、思想習慣をも越えられる。

本当に素晴らしいこととして思うのは、やれどもやれども極められんような、常に磨きをかけ続けていく芸というかな。その人の心の進化で、見る方の感動が深まるような芸もあるといいなあと思う。昔は心の成長と並行してやっていける芸が何時の時代にも何処にも、こういう田舎でもあった訳だ。その芸はまあ50歳以上、心の基礎が出来てからということになるよ。若いもんの完璧な技術や身体の芸もあり、本当に素晴らしい境地になって演じられる芸もある鼓童となっていって欲しいと思うな。（談）



（月刊「鼓童」 2006年12月号より）

［くずはらまさみ／陶芸］
もの作り（陶芸、土人形、民芸玩具、機織りなど）と、その指導　佐渡市羽茂
土地の人の手になる民芸品を扱うお店「古食庵」を営み、古民具の蒐集・復元や、農業、山野草、郷土の伝承料理にも精通するなど、その世界は豊かで幅広い。「Iターン」の受け入れなどを通して、地域を元気づける仕掛人でもある。
実習:年6回程度／自分の潜在意識を引き出す抽象陶芸。茶碗・花瓶・茶道具など、作りたいものを自由に作る。

鼓童メンバーからのメッセージ

「努力は裏切らない!」　見留知弘

しっかりした土台を

舞台に立ちながら、研修生に教えるようになって、14年が過ぎました。

研修生に求めるのは、技術や上手さではなく、まずは体力と根性。これがなければその上に技術はのらない、つまり、しっかりした土台（基礎）がなければ、家（技）は建たないのです。教えたいのはその先にあるのに、太鼓を叩く体力がなければ、その先に行けない。だから体力と根性が必要なのです。

写真：菊池陽一郎

また、芸は教えてもらうのではなく、見て盗め!　という言葉にもあるように、すぐに出来なくても、見て覚えておいて、自分のものに出来るように稽古を繋げていけば、上達の近道だと思います。

物を大切にする心

太鼓やバチや台などを大切にしない者は、上達はしないぞ!　この言葉は、初めて教える時には、必ず言っていると思います。太鼓も愛情を持って接していかなければ、音で返してくれませんし、バチというのは相棒であって、太鼓打ちにとってなくてはならない大事な存在なんだと、ある方から教えてもらいました。

研修所での二年間は、太鼓や踊りや唄の稽古以外にも色々な習い事や農作業があったりと、じっくりと取り組むゆとりはないかもしれませんが、その経験が自分の引き出しになります。目標に向けて、稽古に精進して欲しいと思います。

（月刊「鼓童」 2009年12月号より）

［みとめともひろ／太鼓］
1990年より国内外のツアーで鼓童の舞台に立つ。太鼓のほか、唄、踊り、三味線なども担当。'97年からは、舞台のクライマックスを飾る演目である「大太鼓」の表打ちを務める。
稽古:「屋台囃子」、「三宅」など／実習:バチ作り

研修所修了生からのメッセージ

鼓童の演奏者・スタッフとして、また別の道へ進み、それぞれの世界で活躍する先輩達。
修了後の進路も様々な人達が、研修所で感じ、得たものとは。

「研修所」

小田 洋介（おだ ようすけ）

（2000年度修了／鼓童舞台メンバー）

12年前に佐渡に渡り、舞台に立って10年になりましたが、目を閉じれば昨日の事のように思えます。

この研修所で学んだ事はとても大きく今の自分の基本の一部になっています。

この場所は、鼓童を通じて日本の文化や芸能にふれ、作物にふれ、もちろん和太鼓にふれ、人にふれ、そして本当の自分にふれる事が出来る場所です。

すごくいい場所のように書きましたが、本当の自分に触れる事は、想像以上につらく、厳しいものです。

また、視つめ、認め、それを克服する勇気が無ければこの研修所に来る価値はまったくありません。

和太鼓はもう他でも出来ますからね。

それに研修所だけでは自分に触れきりません。そう、ずっと続く事です。

僕も先輩もまだまだです。

太鼓を学ぶ以上に人を学び自分を見つめ学ぶ、そしてそれを和太鼓に返す。

その過程で得てゆくものはきっと真の宝となる。

太鼓の神様は観ているぞ!!

「すべてに感謝」

齋藤 美和（さいとう みわ）

（2003年度修了／鼓童スタッフ）

「とことん辛いことしておけば、この先大抵のことは乗り越えられる」ということばを受け、何をやるにも不出来な私は、研修生活毎日が体当たり。自分のために全力で過ごすことができた贅沢な時間だった。

研修所で学んだこと、人材育成カリキュラムの意味深さが今になって分かる。「農作業」大地と生命を感じ、「伝統文化」息づく日本の文化の本物にふれ、「郷土芸能」芸能の姿を知り、「走ること」自分と向き合い…自然や人、物、すべてに感謝しながら生活すること。「生活、人そのものが太鼓の音に出る」「無になり太鼓を打つ」～その姿や音が人の心に届く。

鼓童グループの魅力に引かれ、スタッフとなり7年。太鼓の音を聞きながら、鼓童メンバーや後輩（現研修生）、社会で活躍する同期生から刺激をもらっている。「ONE EARTH」の大きな夢に向かって、「すべてに感謝」しながら日々成長していきたい。

修了生からのメッセージ～それぞれの道へ（月刊「鼓童」2009年12月号より）

柳川 好子（やながわ よしこ）

（1999年に在籍／役者修行中）

私は役者を目指す途中で研修所と出会いました。自分への糧の為にどうしても行きたかった研修所では、泣き虫で、甘えん坊で…一年で離れる結果になりましたが、役者として舞台に立てたのは研修所時代があったからこそです。

連日徹夜同然で舞台の小道具を作っていると「どうしてそこまでがんばれるの?」と聞かれます。もちろん「好き」だからですが、研修所での様々な経験が、苦しい時には何度も何度も自分を奮い立たせてくれました。

研修所では稽古はもちろん、衣食住、様々な共同作業や感情を共有して、好き嫌いを超えた「相手を認める」という人間関係が培われました。同期が本音をぶつけてくれたあの冬の日を忘れることはありません。問題に直面していた只中に、研修所を振り返る機会を与えて下さった神サマって、ホント粋な方です。

研修生の皆さん、たくさんの「喜怒哀」を楽しんで下さい。裸になって鼻水たらして無我夢中でぶつかって下さい。どんなことも未来につながります。研修所で出会った場面は自信として存在し続けてくれます。

私の演技の奥底にも「広がる風景」として存在していると信じています。鼓童に感動し、得たいと願った〈あの人たちの背後に広がるモノ〉と同じように、舞台上の魂に映されていると信じています。

舞台「見よ、飛行機の高く飛べるを」で初江役を演じて。
（劇団CANプロ/2007）

園児へ熱心に和太鼓の指導に取り組む。

朝元 尊（あさもと たかし）

（2005年度修了／幼稚園園長）

私は現在、静岡県浜松市内の幼稚園や保育園の仕事、また、大学や専門学校にて講師を担当するかたわら、子どもから大人までの太鼓グループを立ち上げる（鼓童メンバーのご指導にも助けられています）など、やりがいのある仕事に汗しております。鼓童の活動理念の一つである「くらす・まなぶ・つくる」という基礎は、幼児期の現場にも通じていると実感いたします。

さて、研修所に最年長（※）で入所させていただきましたが、当時、相当な決断で臨んだ事を思い出します。そう、決断とは“何か断つ事を決める”ことですから…。いま、一歩引いて想えば、鼓童の膝元で学ばせていただく機会をいただきましたが、近くに行けば行くほど遠くに感じ、現在のように遠くなれば何か近くに鼓童の存在があるという空気感があります。鼓童で学ぶことは、大学で学んだ以上に人づくりという観点から言えば、優れた学びの舎だと思います。研修生は少なからず人生の指針となるような“芯”の部分が形成されているはずです。どこかで観た映画で「大いなる力は、大いなる責任が伴う」という言葉が記憶にありますが、鼓童という存在（研修生含む）は社会、いや世界からもそう観られているのではないでしょうか。

どうか、鼓童の芯の力を世界調和にますます情報発信してください。情報は移動距離に比例しますから。

※ 朝元尊さんの入所時の年齢は38歳。この記録を破る研修生は未だに現れておりません。

鼓童と鼓童研修所の沿革

1970年 「鬼太鼓座夏期学校」を開催。（講師:宮本常一、本間雅彦、川添登、島崎信、永六輔ほか／敬称略）

1971年 田耕（でんたがやす）氏を代表に、前年の夏期学校の参加者10名ほどが田氏の呼びかけに応じて「佐渡の國鬼太鼓座」旗揚げ。

1981年 田氏が「鬼太鼓座」の名前を持って佐渡を離れ、残ったメンバーにより「鼓童」発足。代表・河内敏夫。第1回「鼓童・夏の学校」開催。テーマは「佐渡の暮らしと工夫」。

1985年 当時の本拠地であった真野町・大小小学校跡地にて研修生受け入れ開始。研修期間は半年。専任者なし。メンバーと研修生が生活を共にしながら稽古を行った。

1986年 高千北小学校跡地（相川町・北田野浦）に研修所を開設。研修期間は1年に。専任者は大井良明。

1987年 代表の河内敏夫の急逝によって、大井良明が代表に。近藤克次氏が研修所の専任者となる。河内の追悼公演「鼓童スペシャル」を東京、大阪、佐渡で開催。

1988年 鼓童村を小木町・金田新田に開村。第1回アース・セレブレーション開催。研修生も現場で実地研修を行った。

1991年 9月、台風により研修所（特に稽古場）が甚大な被害を被る。

1992年 舞台班の拠点となる鼓童村の稽古場が竣工。大小を第1研修所とし、北田野浦を第2研修所とする。

1993年 近藤克次氏が鼓童を離れ、大井良明が再び専任者となる。

1995年 研修生と佐渡島内の中学生の交流公演スタート。

1996年 両津市柿野浦地区の旧岩首中学校校舎に研修所を移転。研修所のスタッフを大井良明・石原泰彦の2人体制とする。12月、マラソン大会では、鼓童村から研修所までの42.195kmを走った。

1997年 鼓童文化財団設立。研修所を2年制とする。スタッフ志望の研修生の受け入れも開始。

1998年 2年生が柿野浦の春祭りに参加し、鬼太鼓を打たせていただく。研修所を会場に開催するワークショップ「鼓童塾」が10周年を迎える。研修生自身の企画により「第1回収穫祭」を開催。（以後毎年開催）石原泰彦が専任者となる。

2001年 アメリカで独特な音楽活動を行っているグループ「リズミックス」の企画による日本文化体験ツアー「リズミックス・ワークショップ」を研修所で受け入れ。日常空間に大人数の外国人を受け入れての異文化交流を行った。

2002年 25歳までだった研修所入所時の年齢制限を廃止。この年は18歳から32歳までの12名が入所した。

2004年 青木孝夫が鼓童代表となる。

2005年 研修所が柿野浦に移って10周年を迎えたのを記念して、柿野浦の研修所を修了した鼓童メンバーが、収穫祭の中で小公演を行った。

2006年 地元の方々のお力添えにより、研修所体育館（稽古場）の屋根瓦を葺き替え。鼓童結成25周年。記念の公演として、坂東玉三郎氏との共演による「アマテラス」を東京（世田谷パブリックシアター）と京都（南座）で行った。

2007年 アース・セレブレーション20周年。本年の入所者から、2年生に進級する者は鼓童メンバー（プレーヤー、スタッフ）志望者のみに限定。

2009年 研修所に一番近い中学校である、松ヶ崎中学校との交流が10年を越える。これからもつながりが続くよう、唄と太鼓を使った曲「友情ソング」を中学生とアイデアを出し合って作曲した。

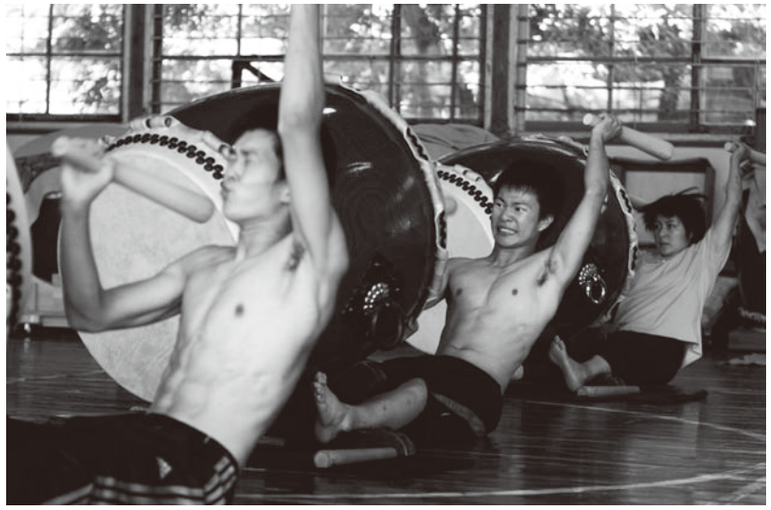
1981年「鼓童・夏の学校」

1988年 鼓童村開村

1997年 鼓童文化財団設立

2005年 柿野浦研修所10周年

応募資格／応募方法／修了後の進路など



来たれ、人材!

鼓童文化財団研修所では、次代を担う
幅広い人材を募集しています。
佐渡という豊かな自然環境の中で学ぶ2年間。
あなたの可能性を試してみませんか。

◆ 応募資格

18歳以上の健康な方。
性別、経験、学歴、国籍は問いません。

※日本語を母語としない人は、研修内容を理解できる程度の日本語の能力が必要です。
※鼓童のプレーヤー、スタッフを目指す方だけでなく、研修そのものを目的とした方も受け入れます。（1年間）

【応募方法】

◆ 書類の送付

まずは、ハガキまたはEメールにて、名前・年齢・住所・電話番号・Eメールアドレス・職業を明記の上、「応募案内」をご請求ください。その上で、必要書類を研修所までお送りいただきます。
（履歴書、健康診断書、作文等）

◆ 面接

上記書類選考を経て、例年1月上旬に研修所にて1泊2日の面接を行い、実地に選考いたします。太鼓、踊り、唄の3つに分けて、実際に身体を動かしたり、声を出したりします。内容については、経験を必要としないものです。また、面接では本人の志望や意志の確認等を行います。

※応募期間等の詳細は、その年ごとのご案内をご確認ください。

【研修所見学】

応募を希望される方、および検討されている方を対象に、研修所の見学日を予定しています。研修生と寝起きを共にして、稽古の見学や農作業、また掃除やトレーニングなど、研修所での生活を1泊2日で体験していただけます。

※費用、日程等の詳細はお問い合せください。

【研修期間:2年間】

◆ 1年次:「総合課程」

伝統文化と音楽表現の基礎を学びます。将来の志望・目的に関わらず全員同じ研修内容です。

◎進級／進路について

中間面談を行い、2年への進級や研修修了後の志望についての意思確認をしていきます。

鼓童のプレーヤー、スタッフを目指す人は、1年次の終わりに進級のための選考があります。
鼓童のメンバーではなく、自分の持つ目標に向かう人については、研修は1年間です。
「佐渡の地域作りに参加するための学習」を希望する場合は、研修所とは別に鼓童文化財団の実習制度があります。

◆ 2年次:「専門課程」

実践的な力を養う内容が増えていきます。
鼓童のプレーヤー、スタッフを目指す人を対象としています。一部のカリキュラムが選択制となります。

◎進路について

2年次も中間面談を行い、研修修了後の志望についての意思確認をしていきます。

2年間の研修期間の成果をもとに、プレーヤー、スタッフそれぞれに「準メンバー」の選考がなされます。「準メンバー」は約1年間、公演や様々な現場での経験を積んだ後、再び新たな選考を経て正式メンバーとして採用されます。
鼓童のスタッフの仕事としては次のような職種があり、一人の人が複数にわたる業務を受け持つこともあります。

【鼓童スタッフの仕事】

- □ **公演企画制作**
  国内公演、海外公演、学校公演
- □ **広報宣伝／編集**
  機関誌編集、ウェブサイト編集、チラシ等の印刷物作成
- □ **商品開発**
  販売物企画制作、販売
- □ **経理／総務**
- □ **顧客サービス**
  鼓童の会（ファンクラブ）運営、チケット販売業務
- □ **アース・セレブレーション**
  企画、運営
- □ **舞台監督**
- □ **照明／音響**
- □ **衣裳**
- □ **フィジカルケア**
  体調管理、マッサージ、栄養指導など
- □ **各種公益事業**
  鼓童文化財団研修所や佐渡太鼓体験交流館の運営

よくある質問

Q. 太鼓は未経験ですが、応募できますか?
A. 応募できます。研修内容についても、太鼓の経験を前提としたものではありません。

Q. 研修生の募集は毎年ありますか?
A. 毎年行っております。

Q. 応募の時点では17歳でも、応募できますか?
A. 応募できます。研修所への入所時に18歳になっていれば大丈夫です。また、応募できる年齢に上限はありません。

Q. 外国人の応募は受け付けていますか?
A. 応募は、国籍に関係なく受付けています。
ただし日本語を母国語としない人の場合は、稽古や講義、生活の中での日本語を理解できるだけの十分な能力が必要です。研修所が2年制になった1997年以降2009年までの間に、アメリカ・カナダ・フランスから5名の研修生を受け入れています。

Q. 研修所への途中からの入所(4月以外)はできますか?
A. できません。全員が、4月からの入所となります。

Q. 研修生には何度でも応募できるのでしょうか?
A. できます。特に制限は設けておりません。

Q. 毎年どのくらいの応募があって、何人ぐらいの人が入るのでしょうか?
A. その年によって増減はありますが、最近では毎年20名～30名ほどの応募があります。また、その中から10名余りが研修生となっています。

Q. 研修所に入るまでに身に付けておくと良いこと(体力作り、リズムの基礎など)はありますか?
A. 基本的な生活のリズム(早寝早起き)や禁酒禁煙などは、身につけておく必要があります。また、姿勢なども短期間で身につくものではありませんので、日常生活の中で自分なりに意識しておくことは役に立つでしょう。
太鼓などの技術的なことに取り組むのもひとつですが、いろんな舞台(太鼓に限らず)や祭りを見たり、自分のふるさとを見直したり、本を読んだりと、長い目で見て将来自分の糧になりそうなことに取り組むことも大事にしてください。

Q. 研修所での共同生活に入る前に身につけておくとよい生活技術にはどんなものがあるでしょうか。
A. 入所後すぐに食事当番が回ってきます。野菜の皮むきを始め、料理の基本技術を身につけておいた方がよいでしょう。約20人分の食事。何をどのように作れば良いか、イメージしてみてください。「自分のことをすべて自分の手で行える」ことは幸せなことです。自分の生活のすべてを細かく観察して、準備してきてください。

Q. 研修期間中に、アルバイト等で収入を得ることはできますか?
A. できません。研修費等については、入所までに準備をしておくことが必要です。
なお、研修費の詳細については、お問い合せください。

Q. 研修期間中に自宅に戻る機会はあるのでしょうか?
A. 1年次から2年次に進級する時(1月下旬)に5日ほど冬休みがあり、帰省することができます。それ以外は長期間の休みはありませんので、自宅に戻ることはできません。ただし家族の冠婚葬祭、その他緊急時には、必要に応じて帰省することができます。

Q. 鼓童のメンバー以外の、研修修了後の進路について教えてください。
A. 進路は以下のように様々ですが、研修所での経験を経て、それぞれの持ち味を生かせる道へ進んでいます。
太鼓や笛の演奏活動(プロ・セミプロ・アマチュア)・俳優・保育士・教師・農家・酒作りの職人・消防士・大学へ進学・公務員など。
また、佐渡の土地と環境の中で研修の成果を活かす道もあります。

■財団法人 鼓童文化財団

役員・評議員(2010年4月1日現在、50音順)

理事長	島崎 信	武蔵野美術大学名誉教授
副理事長	山口幹文	鼓童演出顧問
常務理事	青木孝夫	鼓童代表
理事	浅野昭利	財団法人浅野太鼓文化研究所理事長
	髙野宏一郎	佐渡市長
	森 千二	音楽プロデューサー
監事	荒井久夫	税理士
	佐藤一行	鼓童会計顧問
評議員	五十嵐 實	税理士、日本自然環境専門学校長
	伊藤文吉	財団法人北方文化博物館館長
	永 六輔	作家
	佐々木 愛	劇団文化座代表、女優
	関原 剛	協同組合ウッドワーク顧問
	等々力好泰	新潟トヨタ自動車株式会社社長
	冨田 勲	作曲家
	中川忠夫	元小木町長
	姫田忠義	民族文化映像研究所所長
	クリストファー・遥盟・ブレイズデル	尺八演奏家、国際文化会館芸術プログラムアドバイザー
	ロビン・ベリントン	元駐日アメリカ大使館　文化参事官
	本間雅彦	元佐渡・畑野町史編纂委員長
	マーク・ロス	ダイオラマ文化センターディレクター
	武者利光	東京工業大学名誉教授、ゆらぎ研究所、脳機能研究所所長
事務局長	菅野敦司	鼓童役員

鼓童文化財団研修所2010-2011
2010年5月1日発行
発行:財団法人 鼓童文化財団

Editorial Staff: 山口康子、千田倫子、石原泰彦
Graphic Designer: 田中文太郎(Bt_arts)
Assistant Designer: 織田瑠美(Bt_arts)
Photographers: 太田順一、岡本隆史、佐藤正治、田中文太郎、夛留見彩、南しずか、宮川舞子、吉田励
［鼓童］西田太郎、千田倫子、石原泰彦、眞貝祐子、山口康子、
洲﨑拓郎、洲﨑純子、松田菜瑠美、メラニー テイラー

掲載の写真および文章の無断転載を禁じます。

財団法人 鼓童文化財団
〒952-0611 新潟県佐渡市小木金田新田148-1 鼓童村
Tel. 0259-81-4100 Fax. 0259-86-3631
E-mail: zaidan@kodo.or.jp
Website. http://www.kodo.or.jp

(裏表紙写真) 2001年3月、鼓童村の中庭に植樹された欅(けやき)。同じ欅から作られた太鼓の音を毎日聞いているためか、樹齢以上にすくすくと大きく育っています。